

## なぜ〈中国の戦線〉を問うのか —日本における戦争記憶の現在形—

Why question the “2nd Sino-Japanese War”?  
—The present tense of ‘War memories’ in Japan—

五味 洵 典嗣<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学文学部日本文学科

Noritsugu Gomibuchi<sup>1</sup>

<sup>1</sup>The Department of Japanese literature, Otsuma Women’s University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：日中戦争，戦争記憶，検閲，メディア統制

Key words : 2nd Sino-Japanese War, War memories, Censorship, Media control

### 抄録

戦後日本の文学，思想，映画，サブカルチャーなどの諸テキストに関心を寄せる者なら，それらのテキストに第二次世界大戦の巨大な影がしばしば見て取れることはすぐにわかる。〈先の大戦〉にかかる言葉やイメージは，日本語の言説の中に巨大なアーカイブを構成してきた。しかし，そのアーカイブは明らかな偏りを抱えている。奇妙なことに〈先の戦争〉をめぐる日本社会の集合的記憶は，アジアで戦われた戦争，とりわけ8年間に及んだ中国大陸での戦争をほとんど欠落させているのである。

20世紀の日中戦争は，確かに過去の戦争である。だがそれは，敗戦後の日本社会がその記憶を十分に社会化・公共化してこなかった戦争でもある。東アジアの国際的な環境が1990年代以降最悪の状態にあると見える現在，日本語による戦争記憶のアーカイブを振り返り，現在の立場からその経験の語りと表象を問い直すことは，喫緊の重要性をはらんでいる。

### 1. 戦後日本の〈戦争の記憶〉

20世紀後半の日本で作られた文学・思想・映画・サブカルチャーの諸テキストに少しでも関心を寄せたことがある者なら，日本にとっての第二次世界大戦——この戦争を日本語でどう呼ぶか自体がじつは論争的なのだが——の経験と記憶が，いかに巨大な影を落としてきたかはすぐにわかるはずである。

それらは，もしあのとき違う選択をしていたら，といういくぶん修正主義的な関心を伴いながら，回顧的な検証の対象と見られてきただけではない。日本社会にとって第二次世界大戦は，小説や詩や演劇が真剣に取り組むべき重い主題であり，個や集団がどう振る舞うべきかという倫理的な問いの起点であり続けてきた。ある場合は，まるで明確な意思決定の主体を欠いていたとも見える戦争体制自体が思想的な課題と意識されたし，奇蹟とも言われた経済成長を可能にした条件として大仰に

取り上げられることもあった。一方では，いまや現代日本の〈ソフト・パワー〉の象徴へと祭り上げられたマンガやアニメーションのようなエンターテインメント物語のモチーフの源泉ともなってきた。戦場や軍隊経験にかかわる話題だけではない。強制的であったり，他に現実的な選択肢がなかったのに〈自発的〉と見なされたりした帝国内外への大がかりな〈移動〉の経験や，帝国の敗北が直接の引き金となった社会秩序の軋みと再編にまつわる記憶まで含め，〈先の大戦〉をめぐる言葉とイメージは，日本語の言説の場で一つの巨大なアーカイブを作り上げてきたと言える。

だが，このアーカイブが明らかに偏ったものであることも疑えない。試みに問うてみるとよい。なぜ日本社会では，1941年12月以降の戦争については，真珠湾・ミッドウェー・ガダルカナル・サイパン・レイテ・硫黄島・沖縄と，個々の作戦や激戦地の名前がたびたび口にされるのに，なぜ

1937年7月に始まった戦争については、南京での戦闘ばかりが焦点化されるのか。なぜ1945年3月の東京空襲の悲惨さはくり返し言及されるのに、同じく戦時下の首都であった南京や重慶への無差別爆撃は、一部の歴史家や研究者が問題にするだけなのか。もちろんここには、被害の側と加害の側に横たわる記憶の質の違いが関係している。だが、かりに日本語の言説が〈われわれ〉の側へと囲い込む死者たちだけを考えたとしても、日本軍将兵が〈玉砕〉という名の惨めな大量死を遂げたのは、太平洋の島々だけではないのである。アジアの各地域、わけても、8年間戦争が継続した中国大陸での戦争にかかわる日本社会の記憶の稀薄さは、端的に言って異様である。

ここには、テッサ・モーリス・スズキが言う、メディア化された記憶の政治＝経済学が確実に作用している。「大衆文化」には、「特定の出来事やイメージをくりかえしとりあげることで、歴史の特定の部分をなじみ深く、はっきりイメージできるものにする反面、別の部分を疎遠でよくわからなくする」傾向がある、ということだ<sup>[1]</sup>。メディア化された過去の中から、誰が、どんなイメージを、どんな立場から、どんな手段で呼び出すのか。想起する時点の歴史意識に明らかに影響され、規定されたその作業自体がアーカイブを上書きし、よりアクセスされる情報とそうではない情報との格差をつくり出す。何度も呼び出された情報にはインデックスが付いて、すぐに探し出され想起される対象となる。何度もくり返し呼び出されるから、さらに詳細なデータも付け加わる。集積された情報の量や性質、密度だけではなく、そもそも思い出されるかどうか、その情報が過去のイメージとスムーズに接続されるか否かという点に、決定的な違いが生じてくるのである。

もちろん、第二次世界大戦にかかわる日本語のアーカイブの偏りを是正しようとする企ては、それぞれに限界や問題を抱えながらも、持続的に行われてきた。少なくとも1990年代までは、第二次世界大戦の戦場体験者・戦争体験者を中心とした経験的な厭戦と戦争忌避の語りや、アーカイブに収められる言葉を積み増す動機付けとなってきた。また、そうした感覚を分け持った人々の中には、決して日本社会の多数派にはならなかったが、戦争責任や植民地支配責任の問題に気づくことで、

体験と証言の掘り起こしに尽力したり、アーカイブから記憶を読み出す構えや態度を複数化しようと試みたりする者もあらわれた。よく知られているように、日本語の文脈では、第二次世界大戦にかかわる残酷な記憶に言及する際、加害と被害の錯綜した問題に立ち入らずに済ませるために、「戦争の悲惨さ」という、ひどく曖昧で抽象的な言いまわしが多用される。まるで戦争を災厄のように語るおなじみの表現だが、そのような紋切型の言葉も、さきに述べたような具体的な作業に裏打ちされることで、少なくとも敗戦後の日本社会の右傾化を押しとどめるブレーキとしては機能していた。

だが、〈戦争の世紀〉と呼ばれた20世紀が終わって15年が経った現在、日本敗戦後に曲がりなりにも積み重ねられてきた知的な蓄積は、メディア企業とインターネット空間の双方で互いをけしかけあうような歴史修正主義の狂騒にさらされ、ほとんど押し流される寸前とも見える。とくに、2000年代の新自由主義改革に対するささやかな揺戻しとしてあった民主党政権の挫折以後、日本国家の国際的な存在感の回復を政治・経済の軍事化を通して成し遂げようとする勢力は、まるで戦時体制のシミュレーションでもするかのように、メディア企業を選別し、人々と戦争の記憶とのかかわりかたを管理・統制しようとしている。彼ら彼女らは、日本帝国の敗北に至る戦争と植民地支配の記憶を一つの色で塗りたくることで、体験と記憶のアーカイブ自体を無意味化しようとしているのである。

20世紀の日中戦争は、確かに過去の戦争である。同時にそれは、敗戦後の日本社会が、その記憶を十分に社会化し公共化してこなかった戦争でもある。東アジアの国際的な環境が1990年代以後最悪の状態とも見える現在、日本語による戦争記憶のアーカイブをふり返り、現在の立場から、あらためてその経験の語りと表象を問いなおすことは、喫緊の意義を有しているのである。

## 2. 「私は悪魔になつてはみなかった」

よく知られているように、日中戦争を描いた最大のベスト・セラーである火野葦平『麦と兵隊』（改造社、1938）は、次の一節で閉じられている。

……奥の煉瓦塀に珠数繋ぎにされて居た三人の支那兵を、四五人の日本の兵隊が衛兵所の

表に連れ出した。敗残兵は一人は四十位とも見える兵隊であったが、後の二人はまだ二十歳に満たないと思はれる若い兵隊だった。聞くと、飽く迄抗日を頑張るばかりでなく、こちらの間に対して何も答へず、肩をいからし、蹴らうとしたりする。

私は眼を反した。私は悪魔になつてはゐなかつた。私はそれを知り、深く安堵した。

徐州作戦での任務をひとまず終えて、上官から基地に戻ると告げられた火野葦平＝玉井勝則陸軍伍長は、「歩兵衛兵所」の方から聞こえてくる人声に足を止める。この数日間、「毎日千五六百は下らない」ほど多くの「敗残兵」が捕らえられていたのだ。火野は、中国各地から召集され、「殆ど飲まず食はずでへとへとになつてゐる」彼らのありように中国軍の混乱と不統一とを観察しつつ、衛兵所の前で、孤独に膝を抱いてうずくまる一人の男に心づく。そばの歩哨が、彼は「今迄の抗日的挙作」を「揚棄」し、「来るべき漢口攻撃の折には自分が道案内を致します」という意味の文字を書いて縄目を解かれた「元中尉」なのだ、と教えてくれる。だが、火野の関心は、生きのびることを選ぼうとした者の側にはどうやらない。さらに歩を進める彼は、むしろ「煉瓦塀に珠数繋ぎ」にされた抵抗する身体の方を思いやらずにはいられない。テキストの行間から、このとき火野が書けなかつた／書けなかつた戦場の喧噪が聞こえてくる。人が人を殴る音、二つの言語で飛び交う怒号、声にならないうめき、捕縛者の思うままだけにはなるまいと身をよじり足を踏んばる音とそんな彼らを無理に引きずる音――。その次に来るものが、自らの誇りにかけて屈従を拒絶した身体が破壊され、生命が奪われる瞬間であることは、誰が見ても明らかだろう。

1941年12月8日以前の中国と日本の武力衝突はあくまで〈事変〉なのだから、俘虜の人道的な取り扱いを定めたハーグ陸戦条約は適用されないなどという下らない言挙げはやめにしよう。敗戦後に火野葦平本人が補ったように、これはまぎれもなく捕虜殺害の場面である<sup>[2]</sup>。引用した最後のパラグラフは、「中国兵の痛みに無感覚ではないヒューマニストという評価」（神子島健<sup>[3]</sup>）の根拠ともなった部分だが、やはり火野がのちに書いたように、「私」が何から「目を反した」かが明示できなかったところに、戦時検閲の痕跡を見て取るこ

とは容易である<sup>[4]</sup>。捕虜を惨殺する日本軍将兵の姿が描かれないうことで、ここで〈殺す〉人間と〈殺さない〉「私」、「悪魔」になっているのかも知れない人間とそうではない「私」という対比が前景化することはない。日本軍隊の内側に亀裂を走らせるような表現は、周到に回避されているのである。

だが、ここでわたしが注意したいのは、このときすでに〈歴戦の勇士〉と言えるほどの戦歴を生きてきたはずの火野が、縛り上げられ自由を奪われた捕虜が殺されるまさにその瞬間、何等かの身体的な反応を覚知し、そのことで自分は「悪魔」でないと再認できた、と書かざるを得なかつたことなのだ。「悪魔」ならざる自分は、戦場に身を置いていても、決して殺人を享楽しているわけではない。他者の身体が切り裂かれ、血液が滾々と流れ出るその瞬間に嗜虐的に見とれているわけではない。まるで念を押すように最後に付加された「私はそれを知り、深く安堵した」という一文は、ここでの「私」の自認が、自己自身の内側から来た衝動を受けとめ、自分なりに解釈したものであることを、そして、「私」自身が、それだけ戦場での自らに対する底深い疑念に囚われ続けていたことを、如実に物語ってしまっている。

1938年5月の中国で火野葦平を襲ったこの感覚は、まちがいになく、彼一人だけのものではない。2003年のイラク戦争に従軍取材した韓国人記者・姜仁仙は、せっかくここまで来たのだからと第一線での取材を懇願した際、アメリカ軍将校から次のように諭されたという。「お願いですから、戦闘を間近で見たいなどという、仕方のない好奇心は捨ててください。死んだり、受傷したりする軍人たちを、そのすぐ横で見るとはなんていうのは、もう、人間として後戻りできない道に踏み込んでいくようなものです」<sup>[5]</sup>。別の軍広報官は、まるで火野葦平『花と兵隊』（改造社、1939）の一節を読んでいたかのように、こう語ってみせる。「先端兵器がいくら発達したからといって、戦争ってというのは結局、人間と人間との間で起こるものだろう」「だからこそ君も、以前の自分としては生きていけなくなるだろうね」<sup>[6]</sup>。イスラエル軍の一員として、占領地で「爆弾やハンマーを持ってパレスチナ人住民の家の壁を通り抜けていく」日々を苦しんだ元兵士の言葉はもっと直截だ。「拘束作戦から帰って自分の姿を鏡に映したりしたら、その次の朝は絶対に起きられませんよ。いったい、どうやって

起きられますか。自分が“怪物”だってわかったら、どうやってそれを続けられるでしょうか。だから任務を続けるためには、自分が“怪物”なのだということに気づかないことです<sup>[7]</sup>。

かつて『戦場の哲学者』のJ・グレン・グレイは、人殺しは少し離れて行う方が楽なのだ、と書いた<sup>[8]</sup>。確かに、際限なく高度化する軍事テクノロジーは、戦場の軍人たちが「自分が行う殺戮」に直面せずとも済む状況を実現しつつあるようにも見える。新しい情報通信技術を最大限に活用した現代の戦争では、人間はもはや「機械の人工器官」「複雑な機械・電子装置の内部要素」へと転化している、という観察もある<sup>[9]</sup>。途方もない時間とおよそ経済合理性に引き合わない額のカネとをかけて開発される新たな兵器は、それを身にまとう暴力の主体から、戦場の具体性・現実性を遠ざけることを目的としている。しかし、どれほど戦争がハイテク化しても、人間が別の人間を傷つけ殺し、傷つけられ殺される戦場の本質は変わらない。どんなに知覚を拡張し、自らの身体を保護しても、実際に戦場の暴力から生き残ってしまった身体は、自分が何者になっているかを疑わずにはいられないのである。だから、「人々は軍隊に行き、戦場に行き、そのまま何も変わらずに帰ってこられたのだろうか」という神子島健の問いは、わたしにとっても重要な問いである<sup>[10]</sup>。自分ももはやかつての自分ではない。ならば、いまの自分は相変わらず同じ人間だと言い切れるのだろうか。個人としての一貫性、人格的な連続性が問題なのではない。この〈わたし〉は、自らがどこかで人間の矩を越えてしまった異形の存在、たとえば「悪魔」「怪物」と呼ばれるような存在になっていないと、確かに言い切ることができるのか。そしてひとは、そんな問いを突きつける戦場を、いったいどんな言葉で書きつけるのか。

### 3. なぜ〈中国の戦線〉を問うのか

1937年7月7日の盧溝橋で起こった武力衝突以後、多くの従軍記者や従軍作家、現地に滞在・在住していた日本人たちが、それぞれのやり方で戦場と後方の状況を伝え続けた。火野葦平（玉井勝則）と上田広（濱田昇）の登場以後は、自らも日本軍隊の一員として銃を執り、戦闘にも参加した書き手たちが、戦争体験・戦場体験に取材した多

くの著作を発表した。成田龍一は、こうした一連のテキストについて、書き手と戦争とのかかわりという軸（戦争の当事者か否か）と記述のスタイルという軸（小説体か日記体か手記・書簡体か）を交差させて考えるべき、と主張した<sup>[11]</sup>。副田賢二は、より端的に、日本軍隊の成員（「従軍者」）かそうでないか（「従軍者」）という区分を提唱している<sup>[12]</sup>。ただし、ここでわたしは、こうした差異を考慮しつつも、中国の戦場を描いた同時代のテキスト群を総体として問題化したい。

むろん、それが誰によって書かれたのか、軍人か軍属かそうでないかという位置の違いが、言説の内容や受容に影響することは確実である。読者に与える印象や効果を考えれば、書き手の実体験として示されたかどうかも大事なポイントになるだろう。しかし、そうした分類や整理以上に重要だと思うのは、同時代の読者に対して、現在進行形の戦争がどのように語られていたか、ということである。

富山一郎は、沖縄戦の記憶を論じる中で、「戦場の記憶は、ナショナルな語りにとって、決定的な源泉であると同時に封印され忘却されなければならない」と言っている<sup>[13]</sup>。これまで数限りなく書かれた戦争の物語がそうであったように、戦場の表象は、想像の共同体としての〈われわれ〉を強力に結びつける美しい物語にとっての尽きせぬ資源となる。しかしその一方で、戦場の表象は——敗戦後の日本語による文学・文化の歩みを見れば明らかかなように——破壊される身体と怪物化する精神の双方を突きつける限りにおいて、同じ〈われわれ〉を切り裂き、愚挙としての戦争の実相を強烈に意識させる。だからこそ戦争遂行権力は、戦場の表象と語りを徹底して管理し統制しようと試みるのだ。

そのように考えるなら、そのテキストが事実か虚構か、体験の記録か伝聞の再話か想像力の産物かその全部なのかという問題は、二次的なものにとどまるとわたしは思う。まず問うべきは、現実に同時代に戦われていた戦場について、何がどのように表象され、それらがどんな物語やイデオロギーを担ったかではないか。さらに、検閲や統制の力にさらされながらも、そのテキストが日本語の戦争記憶のアーカイブにいったい何を書き入れていたか、ということではないか。

では、なぜ1941年12月8日以前の中国の戦場

が重要なのか。ここでは、先に述べた戦後日本社会の〈戦争の記憶〉の偏りという問題のほか、さしあたり以下の三つの理由を挙げておこうと思う。

まず第一に、この戦争自体の性質にかかわる問題がある。この戦争は、東京の政府も南京―重慶の政府も、アメリカ合州国の〈中立法〉の適用対象となることを避けるために、1941年12月の戦争の拡大まで、宣戦布告なしに戦われていた（同時代の日本語の言説では、中国との戦争は、一時的・局地的な戦闘行為という意味を表す「事変」という語で一貫して表現されていた）。しかも、当時の近衛文麿首相は、東洋平和のための戦争と称しつつ、中国の当時の中央政府である蒋介石政権とは交渉しない、と内外に宣言してしまった。つまり、この戦争の〈敵〉は誰なのか、どうすればこの戦争を終えられるのかが明確に語れない状況を、みずから作りだしてしまったのである。加えて、中国国民党軍・共産党軍の双方が日本軍占領地域付近でのゲリラ戦・遊撃戦を積極的に展開したため、中国大陸の日本軍は、〈誰が敵兵で、誰が民間人かわからない〉という状況に投げ込まれるようになる。すなわち、のちに〈三光作戦〉とも称された中国大陸での日本軍の暴虐行為は、のちにリドリー・スコットが映画『ブラックホーク・ダウン』（2001年）で描いたような、非正規戦の不安と恐怖が引き金となっていたのである。日中戦争は、冷戦期以後の〈低強度紛争〉とよく似た特徴を有していると言えるのだ。

逆から見てみよう。19世紀末の第一次日中戦争＝日清戦争とは異なって、中国大陸での戦争を遂行する日本帝国は、手前勝手な理屈の上のことではあるが、中国の人々を完全な〈敵〉と見なしたわけではない。開戦当初叫ばれた「支那暴戻を膺懲する」という標語は、「いけない事をした人に制裁を加えて、二度とそんな事を繰り返すまいという気持ちにさせる」（『新明解国語辞典』）という〈懲らしめ〉のニュアンスを持つ以上、中国（の人々）を自分たちと相容れない憎悪の対象と規定しているわけではない。悪いのは政権担当者である蒋介石とその取り巻きであり、彼らを背後で操る共産主義の陰謀家や老獪なイギリスやアメリカの帝国主義者たちである、というわけだ。だが、とすれば、中国の一般市民だけでなく、前線の将兵が銃を向け合っている中国軍将兵たちさえ、本

来的には和解すべき相手ということになる。こうした矛盾／ジレンマは、同時代の戦争表象・戦場表象に複雑な陰翳をもたらすことになるだろう。大原祐治は、小田切進の調査を踏まえつつ、1941年12月8日の対米英開戦が、文学者や知識人にある種の爽快感をもって受けとめられたと指摘している<sup>[14]</sup>。この事実は、彼ら彼女らにとって、中国との戦争がいかに語りやすく表象しづらいものだったかを逆説的に物語っている。

第二に、戦争体制下の軍や情報当局によるメディア・コントロールのシフト・チェンジと文学・文化テキストのかかわりを具体的に問題化できる点である。よく言われるように、20世紀の戦争は国家の総力戦である。この時期の日本帝国は、最大で250万人もの将兵を中国大陸に送り込んでいたが、これほどの規模の戦争を可能にするためには、植民地を含めた国家と国民の絆、国民どうしの絆をどうにか結び合わせ、つなぎ止めておく必要がある。では、こうした曖昧な戦争で銃を執り人を傷つけること、自分たちともよく似た相手の生を破壊することを、どんな論理やイメージによって正当化するのか。これはまさに、同時代の言説の問題であり、表象の問題であり、物語の問題である。

すなわち中国との戦争は、日本帝国が初めて本格的に経験する情報戦争でもあった。検閲担当当局だった内務省は、局地的な戦闘状態が始まった直後に軍（陸軍）と打ち合わせを開始、戦争報道・戦場報道のガイドラインを定めていた。このガイドラインは戦局の進展に応じてしばしば改訂されたが、注意したいのは、戦時体制下での言説の管理・統制に際して、日本帝国の外部の視線が相当に意識された形跡があることだ。1937年のいわゆる〈南京事件〉報道に象徴されるように、日本帝国の戦争遂行権力は、日本国内で厳格な情報管理を行うだけでなく、外国語出版物の移入や外国メディア経由の情報の流通に神経を尖らせていた。つとに1937年7月13日の時点で、「外国新聞特ニ支那新聞ノ論調ヲ紹介スルニ当リ殊更ニ我ガ国を誹謗シ又ハ我国ニ不利ナル記事ヲ転載シ或ハ之等ヲ容認又ハ肯定スルガ如キ言説ヲ為ス」ことを「自制」させよ、という通牒を発信していた（『出版警察報』107号、1937年7月分）。にもかかわらず、日本国内で発売禁止処分としたはずのテキストが中国大陸に流出し、翻訳され、日本人が日本軍隊

の暴虐と非人道性を認めた作として流通してしまったのだった(『生きてゐる兵隊』事件)。当時の軍と情報当局は、第一次世界大戦でのドイツの敗戦は、国内の反対派や敗北主義者たちによる〈背後からの一突き〉にあった、という発想に強く影響されていた。そのため、まずは国内世論の引き締めを重視し、戦争指導や政府の政策への公的な批判を原則として認めない方針を定めていた。この考え方は基本的にアジア・太平洋戦争末期まで一貫していたと見てよいが、『生きてゐる兵隊』をめぐる一件以後、軍・情報当局は明らかに帝国の外部を意識して行動するようになる。日本語のテキストがつねに翻訳可能性にさらされていることを所与の前提として、積極的な言論統制と〈指導〉に乗り出し始めるのである。

以上のような検討は、日本語の検閲やメディア統制の研究にとっても重要である。近年の日本語の人文科学研究にあって、検閲研究の進展は目覚ましいものがある。山本武利を中心とするグループは、敗戦後占領期のメディアを対象とする広汎かつ着実な調査を行い、GHQ/SCAPによる検閲の実態を明らかにしてきた<sup>[15]</sup>。その動きに呼応するように、浅岡邦雄・紅野謙介・牧義之らが、内務省を中心とする戦前期の検閲について、たぶんにインフォーマルな慣行までふくめ、資料の発掘と着実な研究を公にしている<sup>[16]</sup>。日本大学と韓国・成均館大学を拠点としたプロジェクトは、東京の官僚機構と植民地当局との人的・制度的な交通も視野に、戦前期の日本帝国を「検閲の帝国」として再定義する刺激的な試みを展開している<sup>[17]</sup>。

だが、その一方で、戦時体制期——日中戦争からアジア・太平洋戦争の時代——の検閲・言論統制の実態は、意外なほど明らかではない。もちろん、この時期に書くことや語ることに数多の制約があったことは誰もが知っている。雑誌『改造』に掲載された、細川嘉六の論文に端を発した「横浜事件」に象徴されるような、〈弾圧〉を想像させるできごとがあったこともよく知られている。だが、皮肉なことに、そうであるからこそ逆に、具体的にどんな体制・規制・システムのもとで言説の生産と受容が行われていたか、ほとんど問われたことがなかった。当時を生きた体験者の回想や証言は、多く残されている。しかし多くの場合そこでは、〈軍部が〉〈国が〉〈当局が〉という曖昧な主語が立てられて、どんな組織が、どんな法的根

拠にもとづき、どのように言説の管理統制に力を作用させていたか、具体的に語っていたわけではないのである。

そして第三の論点として、この戦争と日常性のかかわりという問題を挙げておきたい。近年、従来の1930年代研究・ファシズム研究を批判的に検証する中で、この時期の日本帝国の日常を〈明るい〉モダンな時空として再評価するような議論が登場している。たしかに、戦争が本格化した当初の時期には、都市圏を中心に、軍需景気による好況をうかがわせる情景が観察されていた。『キングの時代』の佐藤卓己は、本書が対象とする時期を「戦時雑誌ブーム」「出版バブル」と名付け、従来の「言論弾圧史観」の修整を訴えている<sup>[18]</sup>。

しかし、こうした〈明るい〉〈暗い〉というレッテル貼りに、いったいどんな意味があるのだろうか。むしろ問題とすべきは、いまなお戦時下の日常性が戦時末期・敗戦直前期のイメージで捉えられていることではないか。敗戦後に醸成され一般化した日本社会の〈被害者意識〉ともかかわる論点でもあるが、中井久夫は、「総力戦」下であっても、酸鼻な局面がすべてに広がり万人の眼にさらされるのはほんとうの敗戦直線である」「実際、B29の無差別爆撃が始まる一九四四年末までの内地は欠乏と不自由が徐々に募っていただけであった」と書いている<sup>[19]</sup>。中国大陸での戦闘が長引くに従って、戦争は人々の日常を着実に侵食していた。1941年段階では、帝国内の男子人口の6.9%にあたる約240万人が兵力として動員されていた。だが、この戦争はそれでも、少なくとも初期においては、あえていえば、〈他人事〉の戦争だった。実際、この時期に公開された映画を見ていると、不思議な思いにとらわれることがある。人々は、中国大陸での激しい戦闘を伝える言葉やイメージに取り囲まれながら、ふだんとそう変わらぬ日常を送っていた。

宜野座奈央見は、「日中戦争下で人々はモダン・ライフを手放さなかった」、「モダン・ライフを続ける余裕があった社会では、日露戦争をはるかに凌駕する死者と傷痕軍人の帰還をもってしても、戦争に反対する声が大合唱になることはなかった」と指摘する<sup>[20]</sup>。つまり、少なくとも同時代の都市空間において、戦争と消費主義的な日常性は矛盾しなかった。ならば問うべきは、ひとびとの日常性と戦争・戦場表象がどのようにかかわり、

語られた戦争と戦場がどんな社会的・政治的な役割を果たしたか、であるだろう。1937年から考えても8年間続いた戦争の中で、それらの戦争・戦場表象が、戦時下を生き延びた人々の戦争観・戦争認識にどのように影響し作用したかを具体的に検証することであるだろう。

できれば考えたくないことだが、おそらく次の日本国家の戦争は、社会の大多数の人々にとって、物理的な距離の面でも、動員され参加する人数という意味でも、〈他人事〉の戦争となるはずだ。過去の戦争において、観客としての人々が、戦場の〈同胞〉の語りと表象をどう受け止めていたか見つけ直すことは、すぐれて今日的な課題である。

### 付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費(S2618)の助成を受けたものです。

### 注

- [1] テッサ・モーリス・スズキ(田代泰子訳)『過去は死なない メディア・記憶・歴史』(岩波現代文庫, 2014)。
- [2] のちに火野は、『麦と兵隊』について、陸軍の検閲のため「私の計算したところでは、二十七箇所が削除訂正されていた」と書いた。火野は、その具体例として、「五月十一日の最後、中国兵捕虜雷国東が麦畑につれ去られて銃殺されるどころ、五月二十二日の終わり、三人の捕虜を麦畑で斬首するところ」を挙げている(「解説」『火野葦平選集 第二巻』東京創元社, 1958)。火野は敗戦後、『土と兵隊』でも捕虜殺害の場面を補足している(玉井史太郎「土と兵隊」戦後版補筆『葦平曼陀羅——河伯洞余滴——』玉井闘志[私家版], 1999)。
- [3] 神子島健『戦場へ征く、戦場から還る 火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士たち』(新曜社, 2012)。
- [4] 戦後に火野は、「私は眼を反した」という一文の前に、次の一節を書き足している。「甚しい者は此方の兵隊に唾を吐きかける。それで処分するのだということだった。従って行ってみると、町外れの広い麦畑に出た。こちらは何処に行っても麦ばかりだ。前から準備してあったらしく、麦を刈り取って少し広場になったところに、横

- 長い深い壕が掘ってあった。縛られた三人の支那兵はその壕を前にして坐らされた。後に廻った一人の曹長が軍刀を抜いた。掛け声と共に打ち降すと、首は毬のように飛び、血が藪のように噴き出して、次々に三人の支那兵は死んだ」。
- [5] 姜仁仙『砂漠の戦場にもバラは咲く イラク戦争従軍取材記』(毎日新聞社, 2003)。
  - [6] 注5, 姜前掲書。
  - [7] 土井敏邦『沈黙を破る 元イスラエル軍将兵が語る“占領”』(岩波書店, 2008)。
  - [8] J・グレン・グレイ(吉田一彦, 谷さつき訳)『戦場の哲学者 戦争ではなぜ平気で人を殺せるのか』(PHP研究所, 2009)。
  - [9] アントニオ・ネグリ, マイケル・ハート(幾島幸子訳)『マルチチュード[上] 〈帝国〉時代の戦争と民主主義』(NHK出版, 2005)。
  - [10] 注2, 神子島前掲書。
  - [11] 成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか 1930年代「国民の物語」批判』(NHKブックス, 2001)。
  - [12] 副田賢二「「従軍」言説と〈戦争〉の身体——「支那事変」から太平洋戦争開戦時までの言説を中心に——」(『近代文学合同研究会論集5 想像力がつくる〈戦争〉／〈戦争〉がつくる想像力』2008.12)。
  - [13] 富山一郎『増補 戦場の記憶』(日本経済評論社, 2006)。
  - [14] 大原祐治『文学的記憶・一九四〇年前後 昭和期文学と戦争の記憶』(翰林書房, 2006)。
  - [15] 山本武利『占領期メディア分析』(法政大学出版局, 1996), 『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』(岩波現代全書, 2013)。
  - [16] 浅岡邦雄「検閲本のゆくえ」(『中京大学図書館学紀要』29:2008.5), 紅野謙介『検閲と文学』(河出書房新社, 2009), 牧義之『伏字の文化史 検閲・文学・出版』(森話社, 2014)など。
  - [17] 紅野謙介・高榮蘭・鄭根埴・韓基亨・李惠鈴編『検閲の帝国 文化の統制と再生産』(新曜社, 2014)。
  - [18] 佐藤卓己『キングの時代 国民的大衆雑誌の公共性』(岩波書店, 2002)。
  - [19] 中井久夫「戦争と平和についての観察」(『樹をみつめて』みすず書房, 2006)。
  - [20] 宜野座奈央見『モダン・ライフと戦争 スクリーンのなかの女性たち』(吉川弘文館, 2013)。

---

**Abstract**

---

This study explores one core question: why we must reconsider 2<sup>nd</sup> Sino-Japanese war today? Anyone interest in the various literary, philosophical, filmic, and sub-culture texts produced in postwar Japan, is well aware of the giant shadow cast by the experiences and memories of the Second World War. Words and images concerning “the great war” have come to form one of the largest archives in Japanese-language discourse. There is no doubt, however, that this is a biased archive. The paucity in Japanese society of collective memories of war in Asia, and in particular of the eight years of continuous fighting on the Chinese continent, is extremely odd. Today, at a moment in which the international situation in East Asia seems worse than it has been since the 1990s, I believe that it is of the utmost importance that we turn back to the Japanese-language archive of the war memories and re-interrogate it over the question of how those experiences were recounted and represented.

---

(受付日：2015年11月23日，受理日：2015年12月1日)

五味 潤 典嗣 (ごみぶち のりつぐ)

現職：大妻女子大学文学部日本文学科准教授

慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程単位取得退学，博士（文学）

専攻領域は近現代日本語文学・文化研究。現在は，おもに戦争・アジア太平洋戦争期の日本語による戦争や戦場の表象とメディア統制とのかかわりについて考えている。

主な著書：『言葉を食べる——谷崎潤一郎，1920-1931』（世織書房，2009年），『コレクション・モダン都市文化 96 中国の戦線』（編著，ゆまに書房，2014年）ほか。